

小学生向けお話しプログラムについて

高木 友子^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

本稿では A 小学校での授業時間を利用したお話しプログラムの構成と演出について報告し、その意義を考察する。お話しは各学年の国語、生活、総合学習の発展として市民ボランティアと担任教師が連携して開催された。学習内容や子どもの発達課題に沿ってテーマに統一性を持たせたプログラムを作ること、詩なども利用して緩急、長短や内容の対照性などプログラムに変化をつけること、群読や朗読劇など演出面の工夫をすることでより質の高いお話しが提供された。

【キーワード】

お話し、読み聞かせ、小学生、国語

1. 読み聞かせの難しさ

絵本などの読み聞かせは、主に乳幼児から小学校低学年の児童を対象に家庭や保育の場、小学校や図書館、書店などで行われている。まだ自分では本を読むことが難しい子どもたちは読み聞かせを通して、言語への関心と言語能力、物語への興味と理解、思考力と読書への意欲を獲得していく。

家庭では養育者が、保育の場では保育者が主に行う。小学校や図書館では、教員や司書が行うこともあるが、多くの地域で市民ボランティアが活躍している。これらの市民ボランティアは教員や司書や読み聞かせの専門家の指導を受けることもあるが、指導は必ずしも義務付けられてはおらず、また、あったとしても導入的に絵本の提示の仕方などが教示されるぐらいで、選書や対象となる子どもの認知発達について十分な指導が行われてい

るとは言えない。小学校教員や司書も必ずしも読み聞かせに精通しているとは限らない。そして読み聞かせの指導者も多くはボランティアの先達であり、自身の経験によった助言に止まることが多く、発達や教育と照らし合わせて読み聞かせを考えるための知識まで備えた者は多くはない。

読み聞かせを行うに際しての準備学習に多くが求められていないのは一つには無償のボランティアにそう多くのことは求めないということもあろうが、もう一つにはボランティアを行う側もそれを受け入れる側も読み聞かせの意義と難しさをそう重くは捉えていないのではなかろうか。ボランティアの多くは育児経験者であり、家庭で自分の幼い子ども達に読み聞かせを行った経験がある者だ。そうであるならばその延長線上で公共の場での読み聞かせも小学生への読み聞かせもできると期待されているのだろう。確かに乳幼児への読み

聞かせと小学生への読み聞かせは全くの別物ではないし、家庭での読み聞かせと公共の場での読み聞かせも同じくするところはある。しかし、全く同じというわけではない。発達が異なれば、興味関心や理解力は当然異なる。家庭で一人か二人の子どもと楽しく読めた本の全てが大人数の子どもを対象とした読み聞かせに適しているとは限らない。図書館で紹介される本は大人数での読み聞かせを想定した物ではない。

特に難しいのは小学生以上を対象とした読み聞かせである。小学生は読書の自立が始まる時期でもある。子どもが自分で本を読む時間が増えるに連れ、読み聞かせの機会が減る。養育者といえども、幼い時期に比べると子どもの読書傾向を把握しづらくなる。

絵本の多くは乳幼児を主対象としている。幼児期後期から子ども向けの本には幼年童話が加わり、年齢が上がるにつれ、文章量、ページ数は増え、音読の難しい本が多くなる。そのような状況で選書研究が足りないと、幼い頃に読んだ本をただ小学生に読んでやるだけになってしまう。幼い頃から好きだった絵本に繰り返し出会うのも意味あることだが、読み聞かせにはもっとできることがある。発達に伴い、子ども達の興味関心は深まる。読み聞かせはそれに応え得る。そして、それは読書への意欲をも育てるだろう。

また、読む力が十分に育つまでは、子ども達は「読む」ことに認知容量を費やすと、内容理解に使える認知容量が不足することがある。つまり自分で読むより、他者に読んでもらった方が高度な内容を理解できる。小学校低学年では自分で読めるようになることも大切だが、読み聞かせで自分が読むよりも高度な内容や新たなテーマに触れ、読書意欲を更に高めることも重要なのである。

2. お話会プログラム

大人数を対象に読み聞かせを行うことをお話会と称することがある。1つの話を読むだけでもお話会ということもあるが、本の読み聞かせだけでなく、手遊びや紙芝居、シアターなどを交えて複数の話を2-30分かけて読むことが多い。図書館や公民館などではこのようなお話会が開催されることが多い。小学校では始業前や昼休みの短い時間で1つか2つの話を読まれることが多いが、たまに授業時間を利用して大きなお話会が開催されることもある。以後、複数の話を読む長めの読み聞かせをお話会と称する。お話会で選書と共に重要になってくるのがプログラムの構成である。1冊1冊の選書が良くともその組み合わせに配慮がなければ良い（楽しい、意義深い）お話会とはならない。何の工夫もなく30分間連続して本を読むだけでは年少の子どもたちの集中力は持続しにくいであろう（例え聞けたとしても、「楽しく」聞けないだろう）し、小学生が対象であっても似たような話ばかり続いてはやはり興味を持続するのは難しいだろう。だが、残念ながらそのようなお話会は少なくない。幼児を対象にしても長めの絵本や素話ばかり組み合わせると30分という幼児にとっては長時間の会が行われていたりする。このような会が催されるのは、プログラムの重要性が読み手に理解されていないからである。事前の打ち合わせもなく、当日読み手がそれぞれ読みたい本を持ち寄るだけという会もある。図書館や公民館で開催されるお話会は出入りが比較的自由であるため、会全体のプログラムの意義が重要視されていないこともあるが、それでも、お話が好きな子どもが集まっているので聞けてしまうのだろう。しかし、例えば、能の合間に狂言が演じられるようにプログラムの緩急、多様性は会の質を向上させる。また、より年長の子ども達であれば、テーマ

など会としての統一性もまた会の質を向上させ、参加意欲の、ひいては読書への誘いに繋がるのである。特に小学校の始業前の読み聞かせや授業時間を利用したお話会はクラス児童全員の出席が前提であるため、必ずしもお話好きであったり、積極的な参加意欲を持っていたりするわけではない参加者を対象に30分以上のお話会を意義深いものとするにはプログラムへの配慮、工夫が必要となる。例えるならお話会はコース料理のようなものである。オードブルやスープ、メインやデザートがテーマを持ってバランスよく構成されていると一皿一皿だけでなく、コース料理全体への満足感が得られる。それと同様に共通のテーマの下にバランスよく考えられたプログラムは1冊1冊の本に止まらず、お話会全体から更に得られる物がある。

本稿ではA小学校における市民ボランティアによる大きなお話会のプログラムの配慮と工夫について報告と考察を行い、小学校における大きなお話会の可能性について論ずる。

3. A小学校とお話会

A小学校は首都圏にある公立小学校であり、都心への交通の便も良い文京・住宅地域にあるため、少子化の昨今にあっても児童数は例年微増しており、2021年度現在約900名の児童を抱え、大規模校と言えるだろう。始業前の読み聞かせは20年以上前から最初は保護者以外の市民ボランティアによって始められ、後に保護者ボランティアが合流し、現在は約30名のボランティアが活動している。始業前の読み聞かせの回数は長い歴史の中で増えることも減ることもあったが、現在は低学年で月に1～2回、中学年で学期毎に1～2回、高学年は学期毎に1回となっている。ただし1年生の4月は2011年から幼保小接続のスタートプログラム内の位置づけとして1時限の始まりに週2～3回の

読み聞かせが行われている。

授業時間を利用した大きなお話会も2011年から始まった。始めは読み聞かせが学習指導要領にも位置付けられている1・2年生と保護者ボランティアと教員が熱心であった3年生で開催された。初年度で手応えを得た保護者ボランティアの働きかけで段々と開催学年を増やし、2016年から現在までコロナ禍での中止を除き、全学年で大きなお話会が開催されている。

手応えを得たとは言っても、初年度のプログラムは未熟な物であった。1年生と3年生では、子どもたちの集中力への配慮がなされており、内容の軽重長短のバランスは良く、朗読劇や手遊び、パネルシアターなどを取り入れ、子どもたちも楽しく集中して参加できるお話会であった。しかし、統一したテーマは設定されておらず、散漫な印象のプログラムであった。2年生は①仕掛け絵本「いのちのまつり『ヌチヌグスージ』」(草場、2004) ②大型絵本「ちびゴリラのちびちび」(ボーンスタイン、2003) ③「うんこ」(谷川、1983) ④「こいぬのうんち」(クオン、2000) ⑤詩「のはらうた」(くどうなおことのはらみんな、1984)のプログラムで「命」というテーマを表現できていたが、「ちびゴリラのちびちび」は幼児向けの絵本であり、2年生には物足りない内容であった。

初期の試行錯誤を経て、2013年頃から、子どもたちの課題とお話会のテーマが合致し、プログラム内の緩急、内容の軽重のバランスがとれるようになってきた。以下、各学年の優れたプログラムを紹介する。

4. 2年生「誕生」をテーマにしたお話会

A小学校では2016年頃まで2年生の生活科で助産師を招いて、誕生についての学習機会を設けると共に、それに関連して子どもたちが自分の生い

立ちを発調べて発表するという活動が行われていた。例年、2年生の保護者ボランティアはそのことを意識してプログラム作りを行った。2013年度、①役割読み「じゅげむ」(川端、1998) ②役割読み仕掛け絵本「いのちのまつり『ヌチヌグスージ』」③「わたしのあかちゃん」(澤口、2006) というプログラムが作成された。

①役割読み「じゅげむ」は川端誠の絵本「じゅげむ」を基本に、一人の読み手がナレーション、父親、となりのおかみさんのセリフを、もう一人の読み手がそれ以外の全てのセリフを担当する。また、じゅげむの名前を全て巻紙に記し、登場人物がじゅげむの名前を呼ぶ度にそれを提示する演出を加える。近所の住人がじゅげむの名前を練習する場では、2年生の児童たちを近所の住人に見立てて、読み手と一緒にじゅげむの名を練習する演出も入れる。この演出によって、子どもたちが受け身の観客としてだけでなく、より主体的に読み聞かせに参加することができる。「じゅげむ」は上演時間こそ長いものの、内容的には「軽」、「笑い」の部分を担当するものである。

②役割読み仕掛け絵本「いのちのまつり『ヌチヌグスージ』」は、ナレーション、こうちゃん、オバアを3人で分担して読む。この絵本は中にページが大きく広がる仕掛けがあり、そこに主人公のこうちゃんから何代も何代も遡った沢山のご先祖達の顔が細かく描かれているので、子どもたちの「見たい」という意欲が非常にかきたてられる絵本である。内容的にはお話会のテーマである「誕生」「命」の核心を捉えた真面目な絵本だが、3人読みで声に変化を持たせることと、絵本の仕掛けで非常に読みやすくなる。最後の③「わたしのあかちゃん」は普通の絵本であり、一人の読み手が通して読む。母親の出産の記憶と子どもへの思いを綴った絵本であり、やはりお話会テーマの「誕生」に合っており、中には排便の話など子ども達

を笑わせる部分もあるが基本的に真面目な内容と言える。3冊目となると普通であれば子ども達も聞き疲れしてくるが、先の2冊で声を出して読みに参加したり、仕掛けの演出に見せられたりして、2年生の集中力はまだ保たれる。また、お話会以前に子ども達は自分の誕生について調べ、助産師から出産について学び、考えてきているので、この話を受け止める素地が十分にできており、彼らにとって興味あるテーマとなっている。これだけの条件が揃えば、子どもたちに話は伝わる。つけ加えるなら、是非、母親である保護者ボランティアに読んでほしい。てらうことなく、心を込めて読めば子どもたちに届く話である。

2014年度は前年度から一部を変更し、①役割読み「じゅげむ」②「ぼくのおじいちゃんのかお」(天野、1992) ③役割読み仕掛け絵本「いのちのまつり『ヌチヌグスージ』」というプログラムになった。事情のある家庭に配慮し、母親の存在を全面に出す「わたしのあかちゃん」をプログラムから外した。この年のメインは「いのちのまつり『ヌチヌグスージ』」であり、それに寄せて「赤ちゃん」でなく高齢者をテーマにした本を1冊入れたいとボランティアが考え、「ぼくのおじいちゃんのかお」が選ばれた。この写真絵本はただ老人のいろいろな表情を集めただけと言えそうなのだが、モデルの加藤嘉の表情が非常に魅力的であり、それを構成した天野祐吉のセンスが非常に魅力的な絵本を作り上げている。①「じゅげむ」と③「いのちのまつり『ヌチヌグスージ』」の間の良い口直しとなった。加藤嘉の表情が非常にユーモラスなので、子ども達から笑いも上がる。その笑いは思わず笑ってしまったという素直なもので、高齢者を嘲笑するようなものではないことを念のため記しておく。

2015年度、2016年度のプログラムは①「おへそのあな」(長谷川、2006) ②役割読み「じゅげむ」

③役割読み仕掛け絵本「いのちのまつり『ヌチヌグスージ』」となった。メインは前年度と同じく「いのちのまつり『ヌチヌグスージ』」のままであったが、「誕生」のテーマを強化して、「おじいちゃんのかお」は外し、「おへそのあな」を導入的に取り入れた。長谷川義史のユーモラスな絵本である。胎児がおへその穴から家族を覗いているというナンセンスなユーモアを提供すると共に、家族が赤ちゃんの誕生を待ち望んでいること、赤ちゃんが自ら意志を持って誕生してくることを伝える良書である。

以上2013年度から2016年度のA小学校2年生の「誕生」をテーマにしたお話会プログラムを紹介した。小さな違いはあるが、いずれもテーマの統一性と内容のバランスのとれた優れたプログラムと言える。当時の2年生の課題とも合致しており、話のレベルも小学生に不足はない。中学年ぐらいつまみまで通用するだろうし、高学年でも（少々易いかもかもしれないが）楽しめるだろうプログラムである。1冊1冊の内容が優れているのみならず、お話会で合わせて提供されることにより「誕生」「命のバトン」というテーマを更に深めることができる。

5. 5年生世界を知るお話会

5年生の総合学習では世界の国々をテーマにすることが多かった。2018年度と2020年度の大きなお話会はその発展として催された。2018年度のプログラムは①二人読み「おんなじ、おんなじ！でも、ちょっとちがう！」（コステキ=ショー、2011）②群読「うしはどこでも『モー！』」（ワインスティーン、2008）③「世界に生きる子どもたち すごいね！みんなの通学路」（マカーニー、2017）④二人（または三人）読み「地球をほる」（川端、2011）であった。「おんなじ、おんなじ！

でも、ちょっとちがう」はアメリカとインドの少年が手紙でお互いの生活を紹介し合い、2か国の文化の異同を知る絵本である。「うしはどこでも『モー！』」は言語（動物の鳴き声のオノマトペ）に注目し、各国語の違いを紹介しつつ、でも牛の泣き声はどここの国でも同じ「モー！」というやはり文化の異同を大胆な絵と共にユーモラスに紹介する絵本である。「世界に生きる子どもたち すごいね！みんなの通学路」はタイトルの通り世界16か国の子どもたちの通学路を写真で紹介している。文字通り野超え、山超え、川越えて、世界の子どもたちは通学している。絶景ではあるが、長く遠い通学路であり、中には命の危険を感じる通学路もある。それらが美しく、迫力ある写真で紹介されている。子どもでも大人でも思わず見入ってしまう絵本である。

「地球をほる」は小学生3人が日本から地球を掘ってアメリカへ行くという奇想天外なユーモア絵本である。アメリカに到着すると英会話で話が進む。対訳もついている。読み手はナレーションと英会話担当と日本語訳担当となる。英会話担当か日本語訳担当のどちらかがナレーションを兼任してもよい。少し演出を加え、主人公たちがアメリカに到着したところで日本語訳担当が飛行機の機内アナウンス風に以下の注釈（本にはない）を加える。「ピンポンパンポーン（チャイムの真似）。ただいまお話はアメリカに到着しました。これより会話が英語となりますが、日本語の通訳をお付けいたします。引き続き『地球をほる』をお楽しみください。」二人読みの場合は英会話担当がナレーションを兼任した方が日本語訳担当の出現が突然で、演出効果が得られる。日本語訳の演出は二通りあり、登場人物毎に声色を変え、感情を込めて読む演出と、本物の同時通訳のように声も感情も平板に読む演出とがある。前者は低い学年でも理解されやすいが、高学年では後者の演出も笑

いを誘う。

2020年度は「おんなじ、おんなじ！でも、ちょっとちがう！」を省き、①「世界の子どもたち すごいね！みんなの通学路」②「うしはどこでも『モー！』」③二人（または三人）読み「地球をほる」というプログラムとなった。

これらのプログラムは「世界」という真面目な学習テーマからの発展であったが、「うしはどこでも『モー！』」「地球をほる」という優れたユーモア絵本を採用することにより、笑いと学びが共に得られるプログラムとなった。

6. 2年生レオニとローベルのお話会

生活科と総合学習の発展としてのお話会を紹介したが、本来、読み聞かせは国語学習の中に位置づけられている（文部科学省、2017）。2018年度、2年生担任よりレオ・レオニとアーノルド・ローベルの世界を広げるお話会のリクエストがあった。A小学校では光村図書の国語教科書を採用しており、その中でレオニ（1969）の「スイミー 小さなかしこいさかなのはなし」とローベル（1972a）の「おてがみ」が扱われているからである。

プログラムは①朗読劇「よていひょう」（ローベル、1972b）「アイスクリーム」（ローベル、1977）②群読「わたしの庭のバラの花」（ローベル、1993）③役割読み大型絵本「アレクサンダとぜんまいねずみ」（レオニ、2012）となった。ローベルとレオニ尽くしである。

「よていひょう」と「アイスクリーム」はナレーション、がまくん、かえるくんを3人で分担して読み、朗読劇の体裁をとり、絵本は提示しなかった。その代わりに模造紙で作った「よていひょう」を小道具として提示したりした。本稿では絵本などの提示があり、読み聞かせの形態に近いものを

「役割読み」、絵本などの提示がなく、演劇的演出が加えられている物を「朗読劇」と呼んでいる。がまくんとかえるくんシリーズは、本、挿絵とも小さく、集団への提示には不向きであり、他方、二人の登場人物の掛け合いが主なので朗読劇に適した作品である。2年生にとっては授業で学んだ「おてがみ」の続編なので、すぐに設定を理解し、お話の世界を楽しんだ。がまくんとかえるくんのシリーズには静かな話や、ややシリアスな話もあるが、このプログラムでは前座的な位置づけなので、コミカルで動的な話を選ばれた。

「わたしの庭のバラの花」は積み上げ歌の絵本である。前のページの言葉に、次のページで言葉が加わり、文がどんどん長くなっていくという言葉遊びの本である。お話とお話の間に口直し、閑話的に言葉遊びが挟まれた。群読とは荒木(2000)によれば「一人ないし、複数の人数をとり混ぜて読み、表現効果を高める音声表現の仕方」であり、役割音読と共に国語教育の音読で用いられる技法である。教員が読むよりもむしろ児童・生徒たちが読み手として主体的に音読を体験するのに用いられることが多い。ただ役割毎に読み手が決まっている役割音読と異なり、一続きの文を複数人で分け合って読んだり、複数人で一つの文を斉読したり、輪読したりなど様々な読み方がある。「わたしの庭のバラの花」では複雑な演出はなく、ページ毎5人で交代で読んだ。必ずしも5人でなくとも2人以上で読めればよい。3人以上で読む場合、一人一人の読み方に特徴を設定する。普通に読む者、ゆっくり読む者、つかえそうになりながら読む者など。必ず一人すらすらと早口で読む者を作る。早口の者は特に長い文を早口で一気に読むようにする。子どもたちにとって早口というのは一つの芸であり、特に面白い文でなくともただ早く読むだけで、子どもにとっては面白い物になるのだ。34ページから35ページにかけてのクライマックス

を一番の早口で一氣にまくしたてるのが盛り上げるコツである。ただ、そこだけでなく、その前に何回か早口を披露し、期待を持たせると効果的である。2人読みの場合は2人で交代に張り合うように段々早口にしていくのが面白いだろう。アーノルド・ローベルの妻、アニタ・ローベルの挿絵も大変美しい。

「アレクサンダとぜんまいねずみ」は大型絵本があるので、お話会で使用しやすい。4人の読み手でナレーション、アレクサンダ、ウイリー、とかけを分担した。ナレーションとかけは兼任可能である。

「誕生」のお話会も子どもたちの反応の良い、楽しいお話会であったが、ローベルとレオニのお話会は国語の教科内容に沿っただけあって、「お話」を堪能できるお話会であった。朗読劇や群読という教員一人ではできない形で生き生きとした読み聞かせを提供できたのも良かったのであろう。一つの一つの話を子どもたちが楽しんでいるのがわかるお話会となった。「わたしの庭のバラの花」というあまり知られていない本を紹介できたことも教員に喜ばれた。2年生になると作者を意識し始め、だからこそ、このお話会を教員が企画したのだろうが、「わたしの庭のバラの花」は詩をアーノルド・ローベルが作り、絵は妻のアニタが描いているという豆知識も、子どもたちに喜ばれた。

7. 3年生斎藤隆介作品のお話会

国語の教科書で取り扱われた作品からの発展としてのお話会には3年生の2014年から2018年の斎藤隆介作品を核にしたお話会がある。光村図書の「国語 三下 あおぞら」には斎藤隆介「モチモチの木」が掲載され、授業で取り扱われている。斎藤隆介の代表作には少年少女の勇気と成長をテーマ

にした物が多く、1967年斎藤初の絵本「八郎」の書籍化より滝平二郎の美しい切り絵と組み合わさった絵本が数多く出版され、「モチモチの木」(斎藤、2002)「花さき山」(斎藤、2003)「半日村」(斎藤、2004)と複数の作品が大型絵本としても出版され、お話会でも活用されている。

2014年のプログラムは以下の通りである。①群読「ぶたラッパ」(谷川、2013) ②朗読劇「あらしのよるに」(木村、1994) ③「ぼくのおじいちゃんのかお」④大型絵本「モチモチの木」。「ぶたラッパ」は、ことばの谷川俊太郎と絵の下田昌克のコミカルな共著作品である。「さんちょうめのラッパっこ」が練習に集まり、子ども達のラッパの音が「ばびぶべほ」の音で表現されるが、一人のラッパだけ「ぶたラッパ」になってしまい「ばびぶべほ」の濁音になってコントロールがきかなくなってしまうという筋書きである。意味のあることばはわずかで、それ以外はラッパの音であるパ行とバ行と途中降ってくる雨音の「ざざ」だけで表現され、経緯はほぼ絵で説明される。この群読は単に役を分担するだけでなく、やや複雑な台本を作成し、ことばはラッパの音を表すのでメロディーをつけた。読み手は6名から成るのが望ましいが、5名でも可能である。指揮者兼主に「ば」役、「び」役、「ぶ」役、「べ」役、「ぼ」役とぶたラッパである。5名の場合は「び」「ぶ」「べ」のいずれかが、ぶたラッパ役を兼任する。まじめに練習する他のメンバーが、ぶたラッパに調子を崩され、巻き込まれていく筋書きなので、コント劇のような演出となる。この群読作品は元々コミカルな作品を大の大人であるボランティア達がコント様に演じることで、各クラスを爆笑の渦に巻き込み、数年に渡りA小学校での人気作品となった。

このプログラムは「あらしのよるに」と「モチモチの木」というボリュームのある作品が2つも入れられているので、導入と合間で重くない、軽

やかに楽しめる作品を意図的に選んでいる。「あらしのよるに」は子どもから大人まで人気を博したシリーズの第1巻であり、このシリーズはアニメ映画やミュージカルにもなっているが、第1巻は暗闇の中での二者の対話という構図から朗読劇に適しており、商業演劇でも上演されている。ナレーション、メイ役、ガブ役の3人で上演される。読み聞かせとしてはやや長めの作品だが、笑いとしりるのあるストーリーなので子どもたちに人気がある。ボリューム、内容ともにお話会のメインたる作品である。「モチモチの木」もメインたる作品だが、子どもたちは既に授業で学び、話を全て知ってしまったので、それとは別にメインレベルの話を紹介したい、しかし、話の内容や演出は重ならないようにという配慮で朗読劇の「あらしのよるに」が選択された。

教科書で既に学ばれた話をお話会に採用することに関しては是とする意見と避ける意見とがある。是とするのは、どうしても国語の授業では作品を細切れにして解釈していくため、話全体を味わいにくくなるので、授業前後に通して大人が読み聞かせて作品鑑賞の機会を設けたいという考えである。また、「モチモチの木」やレオニの「スイミー」、「スーホの白い馬」(大塚、1967)など絵本として出版された作品が教科書に掲載される時文章は全文掲載されても優れた挿絵は部分的にしか掲載されず、十分に鑑賞することができない。前述した通り、斎藤隆介の絵本では滝平二郎の切り絵による挿絵も高く評価されており、その中でも殊に「モチモチの木」と「花さき山」の挿絵はその美しさに定評がある。「モチモチの木」の美しい絵本挿絵を全て子どもたちに見せたいというのも選書における教員とボランティアのねらいである。

2017年度も同様に「モチモチの木」が選書され、①大型絵本「モチモチの木」②「ぼくのおじい

ちゃんのかお」③群読詩「なまけ忍者—それはもう一人のぼく—」(しょうじ、2001)④朗読劇「あらしのよるに」というプログラムになった。群読「ぶたラッパ」は子どもたちに大変喜ばれる作品だが、読み手の人数と練習をかなり必要とする難しいプログラムであるため、読み手に余裕がないと上演が難しい。この年は代わりにコミカルで動きのある作品ということで群読詩「なまけ忍者—もう一人のぼく—」が選ばれた。「なまけ忍者—もう一人のぼく—」はしょうじ・たけしの詩だが、家本芳郎ら(2001)が群読台本を作り小学校、中学校で繰り返し上演されている作品である。詳しくは重水の台本を参照されたい。また、小学生のお話会には上手に詩を使いたいものである。ボランティアの読み手には、そもそも詩を探したり勉強したり(絵本のように外見からわかるように並んではない)、その読み方を考えたり(家庭での読み聞かせに詩を取り入れることは少ないだろう)するのはハードルが高い。しかし、小学生は実は詩を聞くことが好きだし、また、短い詩であれば、子ども達が読みに参加することもできる。群読に限らず、お話会に上手に詩を取り入れると良いアクセントになるし、実のところ、詩は短時間でも濃厚なメッセージを伝えることができる。

既知の話を繰り返し読み聞かせることが悪いわけではないが、既に学習した話から新たな話、本に触れることを選択する教員やボランティアも少なくない。2015年度と2016年度は、そのような次第で、「モチモチの木」の採用は見送られ、斎藤隆介の別の作品である「半日村」が選書された。

2015年度のプログラムは①群読「ぶたラッパ」②「きいてるかい オルタ」(中川、2013)③「もうぬげない」(ヨシタケ、2015)④大型絵本「半日村」⑤詩「三年よ」(阪田、1978)であった。この年のテーマは、斎藤隆介の作品を紹介すると共に「行動に移す勇気」というようなものであつ

た。「半日村」は主人公である一人の少年の行動に村人たちが徐々に感化され、村を幸せに導くという話なので著者の作品紹介のみならず、テーマにも合致した選書である。「きいてるかい オルタ」は恐らく本稿で紹介する絵本の中で最も知られていない本かと思う。書評などを殆ど見たことがない。勉強も運動も得意でなく、気の弱い主人公の少年があるとき意を決して友達に意思表示をしたことから友達との関係を深めていくというそう目新しくない、地味な日常を描いた絵本である。保護者ボランティアが最初この絵本を選書したときに、あまりに地味で退屈する子どもが出ないか危惧した。実際、笑いも何もないが、しかし、この日常的な等身大の主人公の話が3年生児童と担任に染み入っていく様子をこのお話会で目にすることができた。「半日村」は斎藤隆介作品の中では比較的地味かもしれないが、主人公は村を動かした英雄であり、「モチモチの木」の弱虫の豆太も夜の寒山を一人で駆け降りるといふ大冒険をするのである。文学作品としてのドラマは大変魅力的であるが、認知的に発達し、客観性を身につけつつある3年生には平凡なわが身に引き付けることはそう簡単ではないだろう。夢や冒険も間違いなくお話の魅力だが、日常や等身大という要素もまた子どもの心に訴えるのに必要な事だと気づかされるプログラムである。「もうぬげない」はヨシタケシンスケの人気を確固たるものにした著作である。ヨシタケシンスケ作品の魅力は展開される豊かな想像だが、それが些細な非常に日常的な事柄から発することもまた魅力の一つであろう。「きいてるかい オルタ」と「半日村」という佳作ではあるが、反面、道徳的で、一步間違うと説教じみてしまうやもしれない作品の間で子どもたちから大爆笑を引き起こし、良質の口直しでありながら、「行動する勇氣」のテーマにも沿った選書である。

「三年よ」はまさしくタイトル通り3年生へのエールの詩である。「二年の二の字に一本棒を足して三年何組だれそれ」のくだりは子どもにも大人にも「あるある」と思わせる日常を切り取った詩である。40年以上前の詩なので、現代の子どもたちの日常と異なる部分も多々あろうが、それでも4年生に向かう子ども達と3年生を送り出す大人に今なお共通する心に響く詩である。

2016年度のプログラムは①「おとこのこなんてだいきらい だってね」(ファッキーニ、2000) ②「おんなのこなんてだいきらい だってさ」(ファッキーニ、2000) ③「きいてるかい オルタ」 ④ふたり読み 詩「わるくち」(谷川、1987) ⑤大型絵本「半日村」であった。「ぶたラッパ」を上演するだけの人手と練習時間がないことから、少人数でもにぎやかで、プログラムに変化をつけられる作品、また男女分け隔ての少なかった低学年から、中学年となり、男女の対立や友達同士のいさかいの解決が課題となる時期にユーモアを持って支えたいという保護者ボランティアの思いが込められた選書である。「おとこのこなんてだいきらい だってね」「おんなのこなんてだいきらい だってさ」「わるくち」はいずれも相手に悪口を重ねるが最後は仲直りをするという筋立てである。(「わるくち」の最後は仲直りでできていないが、表情や仕草の演出で仲直りを表現する。)ファッキーニの2冊はセットで紹介し、いずれも読み手が情感たっぷりに悪口を言うのに子ども達は共感し、悪口から仲直りしたいという気持ちまで共感を継続させるように読むのが読み手の腕の見せ所であろう。2015年度と2016年度のお話会は国語科の学習の発展と子ども達の生活面での課題テーマとが融合した非常に小学生のお話会らしいプログラムとなった。

2018年度では斎藤隆介作品としては「花さき山」が選ばれ、①群読「ぶたラッパ」②大型絵本「花

さき山」③児童参加ことばあそび「ののはな」(谷川、1973a)「ことこ」(谷川、1973b)「いるか」(谷川、1973c)④朗読劇「あらしのよるに」⑤詩「三年よ」というプログラムになった。「花さき山」は斎藤隆介と滝平二郎の絵本の中でも話の花さき山のイメージを表現した絵が殊更に美しく、「山ンば」によるナレーションの語り口、主人公の少女の辛抱が(心理的に)報われるストーリーと斎藤が「八郎」や「三コ」(1979)など複数の代表作で扱ってきた「自己犠牲のテーマ」が痛ましくなり過ぎず描かれているなどの点から非常に人気のある作品である。前述した通り、大型絵本も出版されているのでお話会で選書されることも多い。しかし、小学校でのお話会の場合、光村図書「道徳4」掲載作品なので配慮が必要な場合がある。一方で、これもまた前述したように教科学習で分読し、細切れに解釈していくことによって、お話全体として味わうことが難しくなってしまうことがある。また、教科書の場合、絵本の挿絵の全ては掲載されないので、美しい挿絵程、改めて紹介したいとも考えられる。そして、「花さき山」の場合、「山ンば」の方言交じりの喋りで殆どすべてが語られるので、この味わいを活かして音読するのは、標準語圏の子どもはもちろんのこと、教員にとってもた易くはないだろう。そういった意味でこの作品をお話ボランティアが読むのは意義のあることと考えられよう。この年は国語で扱った「モチモチの木」以外の作品の中から、4年生の道徳で学ぶ前に、文学作品として「花さき山」を紹介し、美しい挿絵の全てを見せたいという理由で選書された。

③「ののはな」「ことこ」「いるか」は谷川俊太郎の言葉遊び作品の中でもよく知られ、小学校の教材として用いられることが多い。当該年度の学年でも一部、授業の中で紹介され、子どもたちは実際に口にして言葉遊びを楽しんだ。このプログ

ラムでは「花さき山」と「あらしのよるに」と趣は異なるが比較的長く緊張感のある作品が2つ選書されているので、その間に実際に子どもたちも一緒に、ことばあそびうたを口ずさむことにより緊張緩和と気分転換を図った。「ことばあそびうた」は同じ音や言葉の繰り返しという音声的な面白さだけでなく、全て平仮名で表記されたとき同じ文字が並ぶという視覚的面白さもあるので、大きく表示した物を提示した。

児童参加もあり、動的な「ぶたラッパ」と「ことばあそびうた」、長めの話をしっかり聞く「花さき山」「あらしのよるに」とエピローグとしての「三年よ」とバランスのとれたプログラムである。

8. 6年生宮沢賢治作品のお話会

その他、国語科学習の発展としてのお話会に2016年度、2018年度の宮沢賢治作品のお話会がある。光村図書「国語六 創造」には「やまなし」と宮沢賢治の評伝「イーハトーヴの夢」(畑山、2002)が掲載されている。宮沢賢治のお話会は学校に限らず、図書館や劇場などで商業的にも行われている。A小学校のお話会では、子どもに話の筋が理解されやすく、ユーモアのある作品ということで「注文の多い料理店」の朗読劇を中心に、2016年度のプログラムは①朗読「銀河ステーション」(「銀河鉄道の夜」より)②朗読劇「注文の多い料理店」③群読「雨ニモマケズ」となった。「銀河鉄道の夜」は読者から最も愛されている賢治童話と言っても過言ではないだろう。選書を行ったボランティアたちはそれを子どもたちに紹介したいと考えたが、「銀河鉄道の夜」はかなり長い作品であり、6年生児童全員が注釈なく理解するには難解である。そこで「銀河鉄道」のイメージを最もよく表現している「銀河ステーション」の1

章のみを紹介するにとどめた。「雨ニモマケズ」は宮沢賢治の言葉として最もよく知られており、NHK教育テレビ「日本語であそぼ」で紹介されるなどして、子ども達にも、意味はともかくとして言葉としてよく知られている。それを群読として演出し、お話会の締めくくりとした。2018年度は卒業を控えた6年生に饒の言葉を送りたいとボランティアが考え、「雨ニモマケズ」に換えて、宮沢賢治の作品ではないが、銀河鉄道の「鉄道」のイメージからの派生で「出発するのです」(山本)が選ばれた。

9. 考察

優れたお話会のプログラムとはただ優れた話を持ち寄るだけではできない。ひとつひとつの作品が興味深くとも似たような内容の、長大な話が続けば、大人であっても多くの聞き手は集中力を途切らせるだろう。プログラム作成においてはコンテンツの多様性と組み合わせを吟味する必要がある。短い作品と長い作品、賑やかな作品と静かな作品、ユーモラスな作品とシリアスな作品をバランスよくアレンジすることで聞き手が集中しやすい、楽しいお話会が可能となる。幕間的、口直しの短い作品に詩を活用することも効果的である。そして、作品をどう読むか、という演出も大変重要である。「じゅげむ」や「ことばあそびうた」で実践されたように、お話会の読み手である大人だけでなく、子どもたちも声を出す機会は、子どもたちが主体的にお話会に参加でき、より楽しむことができる方法である。読み手が読む場合も読み方の演出が可能である。「わるくち」や「ぶたラッパ」や「うしはどこでも『モー!』」などはそれ自体愉快的な作品ではあるが、群読の演出を加えることで何倍にも面白い読み聞かせとなる。「わたしの庭のバラの花」も積み上げ歌自体面白味の

ある作品だが、複数の読み手がそれぞれ読みの特徴を設定し、掛け合うことにより、文字としての作品にはなかった面白味が生まれた。(ローベルも自作が異国の地でこのような読み方をされるとは思わなかったに違いない。)コミカルな演出だけでなく、「雨ニモマケズ」や「出発するのです」などシリアスな詩も群読演出で声が多層的に重なることにより、更にドラマティックな表現となる。「がまくんとかえるくん」「アレクサンダとぜんまいねずみ」「あらしのよるに」「注文の多い料理店」など役割読みや朗読劇にすることで子どもたちにとって変化に富んだ、そして内容を理解しやすい読み聞かせとなる。読み手が変わることによって、それぞれのセリフがどの登場人物の物なのか、どのような気持ちで発しているのかが理解しやすくなる。

そして、全体を通したテーマの統一性、そのテーマが聞き手である子どもたちの興味関心や発達の課題と、授業展開のお話会の場合は学習内容と、合致しているかがお話会の質に影響を与える。統一テーマによって計算されたプログラムが実施されたとき、子どもたちは単に1冊1冊の本を読むよりも学びの積み重ねを得られるだろう。

本稿ではA小学校のお話会プログラムの中でも優れているものを取り上げた。実践は試行錯誤の繰り返しであり、中には優れたプログラムの前段階として未熟なものもあった。お話会を開催する人々が単独の選書と単なる読みの技術だけでなく、プログラムと演出意義を意識し、子どもたちのために更に優れたお話会を提供することを期待する。

謝辞

お話会の機会をくださったA小学校の先生方と児童の皆さん、お話ボランティアの皆さん、沢山のプログラムとアイデアを提供してくださったYさんと記録を整理してくださったKさん、そして小学校での読み聞かせに関わるきっかけをくれた息子に感謝します。

参考文献

天野祐吉 沼田早苗(写真)(1992)「はくのおじいちゃんのかお」福音館書店
 荒木 茂(2000)「群読指導入門」民衆社
 大塚勇三 赤羽末吉(絵)(1967)「スーホの白い馬」福音館書店
 茅野政徳(2014)「戦後小学校検定教科書における宮沢賢治の伝記教材の変遷」、国語科教育、75、32-39、全国全国大学国語教育学会
 川端 誠(1998)「じゅげむ」クレヨンハウス
 川端 誠(2011)「地球をほる」BL出版
 木村裕一(1994)「あらしのよるに」講談社
 クオン・ジョンセン チョン・スングク(絵) ピョン・キジャ(訳)(2000)「こいぬのうんち」平凡社
 草場一壽 平安座資尚(絵)(2004)「いのちのまつり『ヌチヌグスージ』」サンマーク出版
 くどうなおことのはらみんな(1984)「のはらうた1」童話屋
 小池タミ子・上條晴夫(編著)(1997)「続小学校朗読・群読テキストBEST50」民衆社
 ジュニー・スー・コステキ=ショー 宮坂宏美(訳)(2011)「おんなじ、おんなじ!でも、ちょっとちがう!」光村図書
 斎藤隆介 滝平二郎(絵)(1967)「八郎」福音館書店
 斎藤隆介 滝平二郎(絵)(1979)「三コ」福音館書店
 斎藤隆介(1982)「斎藤隆介全集第11巻」岩崎書店
 斎藤隆介 滝平二郎(絵)(2002)「(ビッグ・えほん)モチモチの木」岩崎書店
 斎藤隆介 滝平二郎(絵)(2003)「(ビッグ・えほん)花さき山」岩崎書店
 斎藤隆介 滝平二郎(絵)(2004)「(ビッグ・えほん)半村」岩崎書店
 阪田寛夫(1978)「三年よ」「夕方のおい」教育出版センター

澤口たまみ 津田真帆(絵)(2006)「わたしのあかちゃん」福音館書店
 しょうじ・たけし(2001)「なまけ忍者—それはもうひとりのぼく」家本芳郎(編著)「家本芳郎と楽しむ群読CDブック」36-41 高文研
 谷川俊太郎(1973a)「のはな」「ことばあそびうた」福音館書店
 谷川俊太郎(1973b)「ことこ」同上
 谷川俊太郎(1973c)「いるか」同上
 谷川俊太郎(1983)「うんこ」「どきん」理論社
 谷川俊太郎(1987)「わるくち」「いちねんせい」小学館
 谷川俊太郎 平田昌広(絵)(2013)「ぶたラッパ」そうえん社
 中川洋典(2013)「きいてるかいオルタ」童心社
 長谷川義史(2006)「おへそのあな」BL出版
 畑山 博(2002)「イーハトーヴの夢」「国語六 創造」119-129 光村図書
 ヴィットリア・ファッキーニ セキグちともし(訳)(2000)「おとこのこなんてだいきらいだつてね」フレーベル館
 ヴィットリア・ファッキーニ セキグちともし(訳)(2000)「おんなのこなんてだいきらいだつてさ」フレーベル館
 ルース・ボーンスタイン 岩田みみ(訳)(2003)「(ほるぶ出版の大きな絵本)ちびゴリラのちびちび」ほるぶ出版
 ローズマリー・マカーニー 西田佳子(訳)(2017)「すごいね!みんなの通学路」西村書店
 宮沢賢治(1989)「銀河鉄道の夜」新潮社
 宮沢賢治(1995)「注文の多い料理店」角川書店
 宮沢賢治 澤野郁文(編)(2013)「雨ニモマケズ」日本群読教育の会(編)「教室で楽しむ群読12カ月[高学年編]」74-76 高文研
 文部科学省(2017)【国語編】小学校学習指導要領(平成29年告示)解説https://www.mext.go.jp/content/20210601-mxt_kyoiku01-100002607_002.pdf
 レオ・レオニ 谷川俊太郎(訳)(1969)「スイミー—小さなかしこいさかなのはなし」好文社
 レオ・レオニ 谷川俊太郎(訳)(2012)「アレクサンダとぜんまいねずみ(ビッグブック)」好文社
 アーノルド・ローベル 三木卓(訳)(1972a)「おてがみ」「ふたりはともだち」文化出版局
 アーノルド・ローベル 三木卓(訳)(1972b)「よていひょう」「ふたりはいっしょ」文化出版局
 アーノルド・ローベル 三木卓(訳)(1977)「アイスクリーム」「ふたりはいつも」文化出版局

- アーノルド・ローベル アニタ・ローベル (絵) 松井るり子 (訳) (1993) 「わたしの庭のバラの花」セーラー出版
- 山本環子「出発するのです」 家本芳郎 (編) (2005) 「群読実践シリーズふたり読み」 46-47 高文研
- ヨシタケシンスケ (2015) 「もうぬげない」 ブロンズ新社
- エレン・スラスキー・ワインスティーン ケネス・アンダーソン (絵) 桂かい枝 (訳) (2008) 「うしはどこでも『モー!』」 鈴木出版
- 「こくご ニ上 たんぼぼ」 (平成22年検定) 光村教育図書
- 「こくご ニ下 赤とんぼ」 (平成22年検定) 光村教育図書
- 「国語 三下 あおぞら」 (平成22年検定) 光村教育図書
- 「国語 六 創造」 (平成26年検定) 光村教育図書
- 「道徳4」 (平成30年検定) 光村教育図書

About Public Reading Programs for Elementary School Students

Yuko TAKAKI

【abstract】

Volunteers have had public readings for children with help of the teachers at A Elementary School. Reading contents were concerned to learning contents of subjects, Japanese, Life, or Integrated Learning. Theme of reading should have unity. Reading programs need fluctuation, short or long, dynamic or silent, humorous or serious. They can use poems, group readings, reading dramas. Good programs and various presentation techniques can make public readings for children more excellent.

【key words】

Public reading, elementary school, Japanese